

臆病者は今すぐにでも逃げだしたいみたいですよ？

ぱいんあつぷる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超が付くほどの臆病者《柳 能義》（やなぎ・のき）の元にある日、一通の手紙が届く

その手紙は、修羅神仏の住まう地、”箱庭”への招待状だった

彼は、ちよつとした《願い》を叶える為、家族を友人をそして、《平穩》を手放し、”箱庭”の地に降り立ったのだった

目次

くプロローグく	1
第一話 手紙	4
第二話 箱庭	6
第三話 問題児たちと臆病者	9
第四話 黒ウサギ	12
第五話 呼ばれた訳	15
第六話 動き出した物語	20
第七話 人外達	23
第八話 新生”ノーネーム”存亡の危機	28
第九話 威圧	33
第十話 才能	37
第十一話 怪物	40

プロローグ

青空の絵描かれた壁、砂の大地が絵描かれた床、無造作に置かれている、人形の数々、その中心に木で作られた小さな椅子に腰かけている自分に良く似た人形が座っているのが見える

どうやら、僕は夢を見ているようだ、それにしても、何時の間に寝てしまったのだろうか？

駄目だ：必死で、思いだそうとしてるのに、先程まで自分が何をしていたのか何も思い出せない

そんな事を考えていると、何時から其処にいたのだろうか？ 目の前にキツネのお面を被った男の子にも女の子にも見える小さな子供が僕の前にしゃがみこんでおり、僕の顔を覗いている事に気付いた
何時の間に、座りこんでいたのだろうか？と思いつながらもどうせ夢だからと思いつ、僕は然程気にしなかった

それにしても、此処は何処だろうか？夢で見るとは、きっと何処かで見ることがある場所なんだろうけど：そんな事を考えていると、目の前の子供は嬉しそうに話しかけてきた

「やあ、来てくれたんだね、ずっと君の事を待ってたんだ」

目の前の子供は、初対面の筈の僕に確かにそう言った
「…君は誰？僕の事を知ってるの？」

僕は不気味なお面を被った子供に恐る恐る質問をした、我ながら自分の夢、ましてや子供にすら恐怖心を抱くとは情けないがこの目の前の子供を見ると何故だか体の震えが止まらない、次に目を離せばその瞬間自分が殺されるのではないかそんな予感が頭を過ってしまう

「まず、君の事を知ってるかっていう質問だけど、当たり前じゃないかー！何せ君は僕らの中じゃ有名なからね！そして、僕が何者かって？はてさて僕は誰でしょう？それじゃあその辺りの説明からしていこうじゃないか」

目の前の子供は、そういうと、何処からか幼稚な、いかにも子供が描きましたという感じの、紙芝居を取り出して、話始めた

「とつても、とおーつても、古いお伽噺の話をしてあげるよ、まだこの世界に”争い”というモノが存在していた時の話さ」

その昔、《魔神》と恐れられた”化け物”がいたそうだ

その化け物は、何よりも”血”と”争い”を好み、《争いが永遠に絶える事の無い世界》を作り出した

しかし、永遠などという言葉は存在しない、というように争いが絶える事の無い筈だった世界の争いは僅か二千年ほどで終わりを告げる事になった

理由は単純さ、既にその世界には争えるだけの力を持った存在が居なくなつた為さ、皆殺しあつちやつたからね

そして、《魔神》は自分の作り出した争いの無い平和な世界で、最後に”神”と呼ばれる存在達を相手に最後にして最大の争いを繰り広げ、そこで打ち取られたのさ

目の前の子供が紙芝居付きで話してくれた物語は、世界中の誰もが知っている有名な物語だ、今の世界からは想像もつかないような事が日常的に起きていた、遠い遠い過去の歴史の物語だ

「でもね、この物語はね？偽りの伝承の部分があつてね、本当は《魔神》を《とある入れ物》に閉じ込めただけで倒せてなんかいないのさ」

その言葉を聞いた瞬間、何故だか胸が苦しくなつた、それはまるで、誰かに心臓を握られてるようなそんな苦しさが僕を襲つた、この話をこれ以上聞いてはいけないそんな予感がする…

「え？そのとある場所は何処かつて？」

僕は必死に自分の両耳を手で押さえつけた、これ以上は聞きたくない、聞いてはいけない気がする

「それはね…《魔神》の大好きな”血”と”争い”から縁の無さそうな臆病で、優しい、そんな生き物の中に閉じ込めたのさ」

目の前の子供から告げられた言葉は両耳をしつかりと塞いでる筈

の僕の耳にまるで耳元で囁いたかのようにハッキリと聞こえていた
…
「あれ、どうしたの？大丈夫？顔色が良くないけど、ボクの話そんなに怖かった？」

目の前の子供は先程よりも愉しげな表情で僕にゆっくりと近付いてくる、僕は必死に後退りをするが目の前とゆっくりと近付いてきている子供との距離を開かせる事が出来ない、否、寧ろその距離は徐々に詰められつつある

「アハハッ、君は本当に臆病だね！」

目の前の子供はそう言うと、突如僕のいる反対方向に歩いていき部屋の中央に置いてあった僕に良く似た人形を大切そうに抱き抱えろと、人形の服を捲った

そこには、チャツクのようなものがついていた、するとその子は口の中から禍々しい光を放つ、黒い太陽のような水晶玉を取り出し、僕に良く似た人形の中へと押し込んだ

「そんな君だからこそ選ばれたんだよ、君はまさに皆の為の”パンドラの箱”になったわけさ、本当に君がいてくれて良かったよ、それじゃ元気だね、入れ物くん」

そして、僕は眠りについた…

第一話 手紙

雪の降る、冷たい夜だった

そんな夜、中々寝つく事が出来なかった、柳 能義は気分転換にと海に来ていた、当然、彼の他に人の姿は無く、海は例年の異常なまでの寒さにより分厚い氷の床を作りあげていた

分厚い氷の床は人、一人が乗ったところで、ビクともしない、見渡す限り分厚い氷で覆われている海を見ると、このまま何処までも歩いていけるのではないかとさえ、思ってしまう

「何で夜なのに、こんなに明るいのだろうかと思ったら、お月様がこんなに近くにあるや…綺麗だなあ…」

雪の降り注ぐ空に浮かぶ、十五夜の月に手を伸ばし手で何かを掴むような仕草をする

「フフツ、こうしていると本当に、お月様に手が届きそう」

自分でも、そんな事がある筈がないのに、可笑しな事を言ったと思った、能義は月に向かって伸ばしていた手をそっと戻そうとし…”掴んだ”

「うえっ!？」

まさか、本当に掴めるとは思っていなかった為、思わず間抜けな声を上げてしまう、初めて触れた月の感触はクシヤツとしてツルツルしてて、それは、まるで紙のような感触だった

「あわわわわ…お月様に手が届いちやっただよ…これって《NASSA》に報告するべきかな?でも、このままだと月見も出来なくなっちゃうよね…皆から恨まれたりとかしないかなあ…?」

そう言いながら、今も自分の手の中に確かにある月を恐る恐る手を開いて覗いてみる

「…手紙?」

彼が、月だと思いながら握り締めたものは、一通の手紙だった、冷静になって空を見上げてみると今も確かに月は氷の大地を明るく照らしていた

「よ、良かったあ…本当に月を掴めちゃってたらどうしようかとか

本気で考えちゃってたよ、でも空から手紙?…まさか月から?ハハツ、ないない」

一瞬、自分の頭の中に浮かんだ考えを、即座に否定する普通に考えたら、そんな事はあり得る筈が無いのだ

そんなあり得ない事が現実には起きた事は自分の知る限り一度しかないのだから

「えっと宛先人は…?僕宛?…まさか本当に月から?」

同名の人の手紙が偶然、風で飛ばされてきたという可能性も勿論あったが、この時僕は初めて、”運命”というものをこの手紙から感じた

「差出人は書かれてないようだけど…あつ、そっか!」

差出人は書いてなかったが僕にはこれが、何処の誰から送られてきた手紙かが、直ぐに分かった

「たまには、こうして夜、出歩いてみるものだね、こんなに”面白い物”が見付かるんだから」

柳 能義はそういうと、嬉しそうに手紙の封を切った

そして、僕は、上空4000mの空にパラシュート無しのに投げ出されたのだった

第二話 箱庭

普段見上げてばかりいる、お空の雲をまさか見下ろせる日が来るとは思いもしなかった

これがもし、登山により見ている景色であるなら、僕はきつと恐怖を忘れて、きつとその光景に感動していた事だろう

そう、登山によるものであるならば…

「うわああああああああん!!」

僕は今、上空4000mの空から、パラシュートも着けずに急降下、否落ちていつている

気絶する事が出来たら、どれ程良かっただろうか、これが夢ならどれ程良かっただろうか？

叩きつけてくる風の冷たさが、これを現実だと教えてくれる、叩きつけてくる風の痛みがキツケとなり中々気を失わさせてくれようとなしい

顔は既に涙や鼻水でグチャグチャに濡れている、僕は地面に叩きつけられ絶命する、その瞬間まで意識をしつかりと保っているだろう

今までの出来事が、頭の中を次々と走馬灯のように流れ込んできた「うわああああああああん、こんな事になるなら、軽々しく、返事するんじゃないかったあああああ!!」

そう、上空4000mなどという馬鹿げたところから、パラシュートも無しに飛ぶなんていう馬鹿げた挑戦をする事になったのは、あの手紙に答えたからだ…

〈三分前〉

手紙に書いてあった内容はこうだ

『悩み多し、異才を持つ少年少女に告げる。その才能を試すことを望むのなら、己の家族を、友人を、財産を、全てを捨て、我らの”箱庭”に来られたし』

”箱庭”…？月の何処かな？行こうにも招待状だけで通行手段も通行料金も書いてないみたいだけど、もしかして、自分で調べて来

いつてこと？いくら掛かるんだろ…全財産を捨てる気でいつて僕一人分の通行費にしかならないみたいだけど」

能義の家は貧乏でこそないが、かといつて裕福かという点と違いう、この世界では極々一般的な家庭で育った

「折角の月からの招待だし、行つてみたい気もするんだけど、そんな額のお金僕個人じゃ出せないしなー、無料なら絶対行くのになあ〜」

この時は、本当に軽い気持ちで言ったんだ…まさかこの後、上空4000mの空に投げ出されるなんて誰が考えられるだろう？否考えられるはずが無い、そんな事が出来るのは余程の馬鹿か、未来視にも似た能力を持つ者だけであろう、残念ながら能義にそんな便利な能力などは無かった

そして、現在上空4000mには落下中の四人と一匹の姿があった、一人を除いた三名は同じように落下している人の存在に気付いたようで、それぞれが同様のの感想を抱いていた

「何処だここ!?!あと、うるさい!」

その声すら、現在進行形で何度も気を失おうと努力している彼の耳には届く事は無く彼は、落下地点の湖に落ちるまでの時間、後悔の叫びをあげ続けた…

「…大丈夫?」

腰を抜かしたまま、何時までも立ち上がらうとしない僕に手を差し伸べてくれた女の子がいた

濡れた猫を抱き抱えた、その女の子はどうやら僕と同じように空から湖に落ちて来たようだ

今も水に怯えている猫だが、この女の子に対しては絶対の信頼を抱いている事が目に見えて分かる、きつと優しい子なのだろう

「?...大丈夫じゃない?」

何時までも、無言のまま行動に移ろうとしない僕を心配してくれたのだろう、猫を抱いた女の子はもう一度同じ声を掛けてくれた

「はいいい…なんとかか…」

辛うじて、出した声は何とも弱々しいものだった

思えば、一体、何度死を覚悟しただろうか？既に涙は渴れ果てており、黒かった筈の目は充血して真っ赤になっていた

「…そう、大丈夫そうには見えないけど」

当然、そんな事を知る筈もない能義は未だにカチカチと音を立てる齒を食い縛り、これ以上心配を掛けまいとする

「ありがとう、でも僕は大丈夫だから、それより君もその猫君も、そのままじゃ風邪引いちゃうよ？」

『そうやで！お嬢、はよ上がろうや』

「うん、そうだね」

それだけ言うとなりの子は濡れた猫をつれて陸へと上がって行った

「…ねえ？あの子さ、最後のあの言葉って僕の言葉に対して言ったものだと思う？」

たった一人、残された能義は誰にも聞こえない程度の小さな声で疑問を投げ掛けた、まるで直ぐ近くに自分以外の誰かがいるかのように「いやさ、僕も周りから見たら似たようなものだからさこう言うのは敏感でね、うん…分かってるって、君の事は誰にも言うつもりはないし、君の力に頼るつもりもないよ」

まるで、何者かが返事を返しているかのように独り言を話す彼の姿は見るものに不気味さを感じさせるものだった

「僕は君に《住まい》を提供した見返りとして君と友達になる事を願ったんだ、それ以上の事を願うつもりなんて無いよ」

修羅神仏の住まう地”箱庭”、そこに呼び出された四人の異才を持った少女少女達、彼等はこの地にてどの様な物語を作り上げて行くのだろうか

第三話 問題児たちと臆病者

上空4000mからパラシュートも無しに湖に飛び込むという、余裕で飛び込み台のギネス記録を塗り替える快挙を成し遂げ、見事生還した四人と一匹は現在、服を乾かす為、陸地へと上がっていた
「し、信じられないわ！まさか問答無用で引きずりこんだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだ、クソツタレ場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ、石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「…いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

「そう、身勝手ね」

そして現在、目付きの悪い学生と如何にも良いとこ育ちのお嬢様という感じの、二人が喧嘩をしている真っ最中だった

「ふ、二人とも落ち着きなつて…別に誰かが怪我した訳でも無いんだしき…」

「服が濡れた!!」

必死に喧嘩の仲裁に入る能義へ、とても先程まで喧嘩をしていた二人とは思えない程息の合った声で返された

「ひええええええええう?!?!」

その事に驚いた能義は、また腰を抜かし超高速の後退りをしながら、ズザザザザという砂の上を滑る音とドボンという水の中に落ちる音と共に湖の中に落ちた

「あ、また落ちた」

そんな状況を猫を抱かえた女の子は冷静に眺め、その状況を短い言葉で説明をした

そして、そんな一連のやり取り物陰から同じく覗いている存在がいた…

(うわあ…なんだかどの方も一癖も二癖もありそんな方達ばかりですね)

物陰に隠れている存在の正体は黒ウサギと言われる存在であり、能

義達を異世界に呼んだ張本人である

本来であればこの場に出て来て、この世界の事などを彼等に説明すべき存在なのだが：今も尚、火花散らす二人と怯えたまま陸地に上がろうとしない男と我関せずの意思を貫いてる女の子の姿を見て、とても会話が出来そうもないと考えた彼女は、もう暫く様子見をしてから出ていった方が賢明だと判断したのだった

「：まず、間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ、もしかしてお前達にも変な手紙が？」

このままではラチが空かないと考えたのか、目付きの悪い学生が話を切り替えた

「そうだけどまずはおマエ」って呼び方を訂正して、私は久遠飛鳥よ、以後は気を付けて、それでその猫を抱き抱えてる貴方は？」

「春日部耀、以下同文」

「そう、よろしく春日部さん、その野蛮で凶暴そうなその貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ、見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です、粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守って上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう、取り扱い説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

「それで：最後に何時までたつても陸に上がろうとしない如何にも、イジめられっ子ぽい貴方は？」

「い、イジめられっ子!? 僕のイメージ酷くないかい!？」

「だって貴方、前髪が長すぎて、目元が良く見えないし、この真夏の中そんなホワホワした服を着ているなんてイジめられてるとしか思えないわ」

そう言われて自分の姿を客観的に見てみると確かにそうだ、親の超過保護により滅多に外に出させて貰えない能義にとつては数ヶ月に一度だけ来る母の友人だという理容師の女の人が来ない限りは基本的に特別な手入れなどもししておらず、髪も伸ばしっぱなしになっていた

「た、確かに…周りの人からはそう見られてもしょうがないのかなあ？…取り敢えず僕の名前は、柳能義だよ宜しく」

「ええ、こちらこそ宜しくね、能義くんが良いのかしら？」

「好きに呼んでくれて良いよ、でも僕…あだ名とかで呼ばれたこと無いから、あだ名とかその…つけてくれると嬉しかったり…」

「あだ名か…」

ゴニョゴニョと誰にも聞こえないくらいの声量で言ったつもりだったのだが、この場にいた全ての者達にはハッキリと聞こえていたらしく能義以外の三者が無言のまま目を合わせ…

「臆病者《チキン》」

「絶対言われると思った!!でも悔しい、初めてのあだ名に少し嬉しいとか思ってる自分がいる!」

顔を真っ赤にしながら、地面を駆け回っている能義を置いておいて能義を除く三人の会話はさらに進展していく

「それはそうとお嬢様、真夏ってのは言い過ぎだ、まだ夏になったばかりだろ」

「二人とも間違ってる、今は秋のはず」

「へ…？冗談だよね？今は冬のはずだけど？」

そこまで口にして、先程まで顔を真っ赤にして地面を駆け回っていた能義も事態の異常さに気付いたのか冷静さが戻ってきた

それぞれが違う、時間軸を差すと言う事として考えられる事は二つ、一つはそれぞれが別々の国の出身という事、そしてもう一つは…

「…私達全員がそれぞれ違う時間から呼び出されたという事？」

飛鳥の口にした、その言葉こそが、四人が考え導き出した答えと全く同じものだった

第四話 黒ウサギ

「…私達全員がそれぞれ違う時間から呼び出されたという事?」

飛鳥の導きだした答えは、その場にいた四人全員が同じように導きだした答えだった

「ああ、どうやらそうみたいだな」

初めに飛鳥の問いに答えたのは十六夜だった

「私も、その結論に辿り着いた」

続いて、耀が

「僕もそれが正解だと思う…でも問題は」

人一倍臆病な能義は、人一倍臆病だからこそ、心配する事がある、そうそれは…

「ああ、俺たちが何のために呼ばれたかだ」

十六夜は此処に来る前に自分に届いた、この世界への通行書とも言える手紙を取り出しながら言った

「私達に何かをさせようとしてる?」

耀も同じように自分に届いた手紙を取り出し、改めて内容を見ていた

「私の所に届いた、この手紙には特に何かをしろっていう事は書かれてないわね」

飛鳥も同じように自身に届いた手紙を確認した

「僕のところへ届いた手紙にも書かれてるのは招待の台詞だけだよ」

能義も一人クシャクシャになっていいる手紙を丁寧に引き延ばしてから手紙に書かれている内容を再度確認するが特に何かをしろというような指定は書かれていない

その場にいた全員が八方塞がりだと考えていると突然、十六夜が口を開いた

「しょうがねえ、そこに隠れているやつにでも聞くとするか」

次の瞬間、物凄い勢いで十六夜が背後の森に突っ込んだ

十六夜が着地したところの地面が抉れ掘り起こされ、樹齢50年は経っているであろう木が、ただの着地だけで掘り返された

そして、そこから隠れてこちらを伺っていた何者かがそこから飛び出した

「あら？ 貴方も気付いてたの？」

そんな、非現実的な光景を見ても全く動じることもなく飛鳥は意外そうに言った

「当然、隠れんぼじゃ負けなしだぜ、春日部も柳も気付いてたんだろ？」

「風上に立たれば嫌でも分かる」

耀も独特の表現だが、どうやら気付いていたようだ

「いや、僕は誰かに何処かから見られてる程度にしか分からなかったよ…」

能義は当然、人一倍怖がりなだけの素人なので視線にこそ敏感だが、どこから見られてるのかまでは分かっていたようだが、これまでもし敵意のある視線なら間違いなく場所まで見抜いていたであろうが…

「ちよ、ちよと待つて欲しいのでございますよー！」

木陰から十六夜に強制的に出ざる得なくされた者の姿を見て全員が少なからず衝撃を受けた

どこぞの高級カジノにいそうなバニーガールが両手を上げて言わずと知れた降参ポーズを取りながら出てきたのだから、何にしても此処に来て初めて会えた人？ だ、常識的に考えればやる事は1つである

「い、いきなり、ごめんなさい！ その… 僕達、今困ってまして… あの… 此処はどこで「えい」

此処が何処かを聞こうとした能義の質問は、耀の耳触りたい欲求に負けた、というかあれは触るといふよりは引き抜きにかかっているよ
うな…

「ふぎやっ?! い、いきなり何をしますか?! いきなり黒ウサギのス

「テキ耳を引き抜きにかかるなんて」

「必死に抗議の声をあげる黒ウサギだったが、このマイペース少女にはそんなものは通用しない」

「あら、この耳本物なの？」

「そう言うとは今度は飛鳥が黒ウサギと名乗った少女の耳を片方驚掴みにする」

「それじゃあ俺も」

「その逆の耳を十六夜が同じように驚掴みにし…」

「左右に同時に引つ張った」

「そして、先程まで静かだった森に、一人の少女の悲鳴が響き渡った」

第五話 呼ばれた訳

「し、信じられないのですよ!? 初対面でいきなり黒ウサギのステキ耳を引き抜きにかかるなんて前代未聞です!」

現在、問題児三名と臆病者一名は正座で黒ウサギからのお叱りを受けていた

「ど、どうして僕まで…」

能義は黒ウサギの耳を引つ張ったりしていない、それどころか触れてすらない、なのにどうして同じように正座でお叱りを受けているのだろうかという思いが少なからずあった

「止めなかったか・ら・で・す!!」

それに対し、黒ウサギはまるで教師のような口調で能義がお叱りを受ける理由を告げた

「うう…僕が言ったところで止まりそうな三人じゃ、どう考えてもないじゃないか」

能義は、やや納得がいかないところもあるものの自分にも怒られる原因はあるのだという事を理解して黙ることにした

すると、そんなやりとりを見てかそれまで黙っていた十六夜が能義にアイコンタクトを送ってきた、どうやら何かをするつもりらしい

「おい、黒ウサギ有名な、とある登山家が残した言葉を知っているか? ある登山家は何故、貴方は山に登るのかと聞かれたときにこう答えたらしいぜ」

「そこに山があるから…とな、そして何故俺達がオマエの耳を引つ張ったかというとな、答えは」

そして、能義は理解した十六夜の送ってきたアイコンタクトの意味を…そして、飛鳥と耀もどうやら理解したようだ

「「そこに耳があつたから!」」

四人の声が一つになった、そして全員の上に奇妙な一体感が生まれた瞬間だった

「本当にお馬鹿様なのですか貴方様方はー!!」

そう言うと黒ウサギは何処からかハリセンを取り出し四人を叩い

た、スパパパーンという景気の良い音が聞こえた

ハリセンは少し痛かったが、能義の心は自然と少し暖かくなっていた

「あははっ！面白いね！もし僕が学校に行けてたら、こんなに楽しかったのかな？」

つい、そんな事を考えてしまう…

「ん？何だ能義は学校に行ったことがないのか？」

十六夜は能義が学校に行ったことがないという事に少し驚いた様子だった

「学校に通えるだけのお金がなかったとかかしら？」

飛鳥は、少し複雑そうな顔で聞いてきた、裕福な家で生まれ何一つ不自由なく暮らしてきた暮らせてきてしまった彼女だからこそ、思うことがあるのだろう

「ううん、そうじゃないんだ僕の家は特別、裕福だったわけじゃないけど特別貧しかったわけでもない、いたって普通の家だったよ、ただ両親が凄く心配性でね」

今まで友達と言えるものいなかった、能義の心に初めて、自分の事を知ってもらいたいという気持ちが芽生えた

「僕が小学校に入ったばかりの時に同じクラスの男の子と些細な事で言い合いになってね、それを両親に知られると、それから僕は学校に通わずに勉強は家で両親に教わることになったんだ」

「それだけでか？確かに過保護過ぎる両親だな」

「そうですね、黒ウサギも能義さんの御両親様はちよつと過保護過ぎる気がするのですよ」

「ははっ、そうかもしれないね…でもそれも仕方がない事なんだよね…何せ僕は…」

「それでも、能義にはお父さんとお母さんがいて羨ましい…」

能義の話を静かに聞いていた、耀が物凄く小さな、か細い声でそう言ったのを能義は確かに耳にした

「とと、僕の話はこの辺にして、僕らを呼んだのは黒ウサギさんって事で間違いない？」

「Yes! 黒ウサギさんとはステキな呼び方ですが黒ウサギは黒ウサギで良いのですよ、能義さん」

「それじゃあ、黒ウサギって呼ばせてもらうね、黒ウサギがどうして僕らを呼んだのかっていう理由だけど…」

「それ私も聞きたかったのよね」

飛鳥は腕組みをしたまま、黒ウサギに言い寄る、そしてその言葉は言葉を向けられた訳でもない能義にすら、妙な違和感を感じさせた

飛鳥の言った、その言葉は十代半ば程の少女が放つような重み、などではなく、まるで国王、それも飛びつきりの暴君からの命令のような：誰もと逆らえないようなそんな予感を不思議と感じさせた

だが、能義に思わず跪きたくなる程の重圧感を感じさせたる言葉を向けられた張本人である黒ウサギは特に動じた様子は見られなかった

どうやら自分の考え過ぎだったと思い、能義はすぐに頭の中に浮かんだ、飛鳥が天下取りに名乗りを上げるようなそんな暴君ではないかという考えが過ってしまったことを恥じた、何て事はない何時も通り自分が臆病すぎるが故に感じた勘違いでしかないのだから

「皆さんにこの修羅神仏の住まう地”箱庭”で面白おかしく過ごしてもらおうと思いい招待したのでござ…」

「嘘だな」

十六夜は黒ウサギが言い切る前に黒ウサギの今の発言は嘘だと言いつ切った

「な、なにが嘘なのでございましょうか…?」

「俺の読みが正しければ、今の黒ウサギの発言には可笑しなところがある」

「可笑しなところ?」

耀には何処が可笑しいのか分からなかったが、どうやら十六夜には突っ掛かる部分があったようだ

「ああ、もし春日部が誰かを家に招いたらどうする?」

「…お出迎えをする?」

耀は少し考えて自分の友達達（動物）を家に招く時の事を考えた

「成る程ね、十六夜くんが言う可笑しなところってのはそういうことね」

耀の言葉で飛鳥はどうやら何かに気付いたようだ

「ああ、そういうことだお嬢様」

「久遠さん、つまりどういうこと？」

「飛鳥で良いわよ、春日部さん」

「それじゃあ、私も耀で良いそれで、どういうことなの飛鳥？」

「黒ウサギは私達を呼んだ張本人だと言った、そして私達が落ちてくる場所も分かっていたにも関わらずどうして迎えにすぐ出てこず、物影でこちらの様子を覗いてたのか？それは、私達を品定めしていたからよ、おそらく私達がこの世界でもやっていけるか辺りを見てたのでしようね」

「ギクツ」

「なるほど」

「そして、品定めをしていた理由として考えられる理由は幾つかあるが、恐らく…」

「助けを求めていたから…そうだよな？黒ウサギ」

十六夜が言い切る前に、今度は能義が答えた

「…柳は何時から気付いてたんだ？」

十六夜が、それまで黙って話を聞いていても気付いてるようには思えなかった能義に対して投げ掛けた

「別に気付いてた訳じゃないんだけど…最初からそんな予感はしてたんだ」

「最初から？最初からって何処からだ？」

十六夜は、当然の質問を投げ掛ける、最初からという曖昧な始まりの言葉は何処を最初として考えるかによってその意味が変わってくるからだ

「この手紙を貰った時からだよ、僕は元々この手紙は月から届いたものだと思ってたんだ、別の星からご指名付きの手紙が届いたんだ、だったら向こうでこっちの人間に頼らざる得ない何か起きたと考えるのは普通のことだよな？」

人一倍臆病な彼だからこそ気付く事がある、それは物事の裏を読み取る力だ、といつてもこれは神からの贈り物なんていうものなどではなく、ただの彼の経験から成せる彼の特技の一つなのだが…

「でも、実際は別の星どころか、別の世界からの手紙だったようだけどもね、僕がこの手紙に応えた理由は僕でも、誰かの助けになれるならと思つて応えたんだ」

十六夜は静かに納得した、ああ…だからか、この誰よりも臆病な筈の奴がどうして、あんな一世一代の選択をしてまで手紙に応えたのか、そうこいつは…柳は誰よりも臆病だからこそ誰よりも優しい奴なんだ

「黒ウサギ、僕は君を助けに来たんだ、頼りない味方かも知れないけど嘘偽り何ていらぬ、僕はどんな絶望的な状況からだって助けを求めている人がいるかぎり逃げ出したりなんてしない！」

先程まで何をするにも、オドオドとしていた臆病な少年は今、初めて神々の住まう地”箱庭”の”挑戦者”である事を宣言した

第六話 動き出した物語

黒ウサギは四人に正直に話してくれた

この世界の事を、そして黒ウサギの所属しているコミュニティはこの世界の絶対の法とも言える、ギフトゲームによって衰退したコミュニティである事を…

「成る程ね、つまり黒ウサギの所属しているコミュニティはこの世界の災厄にも称えられる存在”魔王” っていうのに目をつけられて、今や壊滅的な状況にあるコミュニティって事…」

黒ウサギは、顔を下に向けたまま何も言い返さない、否、何も言い返せなかった

そしてそれは、黒ウサギの所属しているコミュニティに所属したところで大した利益は得られないということは何よりもその沈黙が物語っていた…

そして、その場にいた全員がそれ以上の事を聞いてこなかった、黒ウサギはそれも当然だと理解していた誰だかってそんな厄介事を抱えている所と、これ以上関わりを持つとう何て考えないだろう、いくら特別な力を持った子供達とはいえ、この現状を聞けば逃げたくなくても仕方がない、寧ろ当然の事だ

先程こそ自分達を助けてくれると言った能義だつて本来は物凄く臆病な子供だ、どんな力を持っているかは知らないが、かなりの犠牲を払うことになる、そこまでして初対面の自分達を助ける理由何て無い筈だ

にも拘らず、正直に全てを話したのは一重に黒ウサギの人柄によるものだろう

「いいわ、私、久遠飛鳥は黒ウサギの所属しているコミュニティ”ノーム”に所属する事にするわ」

「…へ？」

黒ウサギには飛鳥の言った言葉が一瞬理解できなかった今までのやり取りの何処に惹かれる要素があったのだろうか

「何？意外そうな顔ね、もしかして嫌なの？」

黒ウサギが呆けた顔をしたまま、立ち尽くしているのを見て飛鳥は少し不満げそうな顔をした

「め、滅相もございませんですのよ!?寧ろ大歓迎なのですよーですが、飛鳥さんは良かったのですか?」

「私は、おおよその人が憧れるであろう、約束された将来も地位も財産も捨てて貴方の手紙に応えたのよ、今更金銭だの地位だのといったものに未練なんてものは無いわ」

「それよりも人手が欲しいにも関わらず不利な事も隠さずに正直に話してくれた貴方のような人がいるコミュニティに入りたいと思うのは当然の事でしよう?」

飛鳥という、この少女は能義が初めて抱いた印象の通り人の上に立つに相応しいだけの存在だった

「私も黒ウサギのいるコミュニティが良い」

続いて耀も黒ウサギのいるコミュニティに入ること宣言した

「あら、良かったの?春日部さん」

「うん、私はこの世界にお友達を作りに来ただけだから」

「そう、それじゃあ私がこの世界に来て初めてお友達に立候補しても良いかしら?」

「うん、私も飛鳥とは仲良くなれる気がする」

「これから宜しくね、春日部さん」

「よろしく、飛鳥」

飛鳥と耀の間に何だか侵しがたいような神聖な空気が流れているような気がしたのは恐らく能義の気のせいだけではないだろう…

「僕も、黒ウサギのところのコミュニティが良いな、最初は助けを求めている人のところなら何処でも良いやってたんだけど、黒ウサギの話聞いた今は違う、黒ウサギのいるコミュニティに入りたい、黒ウサギのいるコミュニティの力になりたいそう思えたんだ」

能義も誰かの助けになれるならという思いから、黒ウサギの力になりたいという意思に変わったようだ、能義本人も気付いてないが、此処に来てから能義は良い意味でも悪い意味でも成長する場面が多い

「飛鳥さん、耀さん、それに能義さんまで…!」

こうして三人が黒ウサギの所属しているコミュニティ”ノーネー
ム”に所属する事を誓った

そして残る最大の問題児、逆廻十六夜の元へ自然と全員目が移る
「なあ、黒ウサギ…この世界は面白いか？」

十六夜の質問は、他の三人も少なからず考えていた事だった、此処
に集まった四人全員が自分達のいた元の世界では何かを感じられず、
その何かをこの世界”箱庭”求めてやって来た者達だ

それは、当然、能義だって同じだ

能義も元の世界では感じれなかった、感じる事が出来なかった、
ほんの小さな些細な願いそれを叶えるためにこの世界に来たのだか
ら…

「yes、ギフトゲームは人を越えた者達だけが参加できる神魔の遊
戯、箱庭の世界は外界の世界より格段に面白い事を黒ウサギは保証い
たします♪」

十六夜の質問に対する黒ウサギの回答は四人が待ち望んでいた回
答、そのものだった

「それじゃあ、決まりだな、俺も黒ウサギのコミュニティに入ってやる
よ」

そして、ようやく長い時間を経て問題児三人と臆病者一人の物語は
幕を開けたのだった…

第七話 人外達

現在、能義、耀、飛鳥の臆病者一名と問題児二名の計三名はジン・ラッセルという緑髪の男の子が待っているという門に向かって歩いていった

何故、黒ウサギと別れたかというそれは、今から五分程前の事に遡る

（五分前）

黒ウサギは最高に上機嫌だった、新しく四人も黒ウサギのコミュニティに入ってくれるというのだから、つい浮かれてしまうのも仕方ない事なのだ

そう、だからつい、新しくコミュニティに入った人達が目を離してはいけない、そんな問題達であるという事を忘れ、目を離してしまう事も：仕方のない事なのである

「…ねえ？黒ウサギ僕らつて全員で五人いたよね？」

「はい♪なのでございますよ」

能義からの質問に黒ウサギは上機嫌で答える、そう今、黒ウサギは新しくコミュニティの仲間になった四人を連れ、コミュニティのリーダーであるジン・ラッセルの所に向かってる最中なのだ

先頭を黒ウサギが、二番目を能義が、三番目を飛鳥が、四番目を耀が、そして最後尾をもう一人、十六夜の計五名で並んで歩いていた筈だ：

「…ねえ？黒ウサギ、十六夜君がいない気がするんだけど」

「い、今何と仰いました…？」

慌てて黒ウサギが後ろを振り返ってみると確かにいない最大の問題児にして、最強の問題児、逆廻十六夜の姿がそこにはなかった

「ああ、十六夜くんならちよつと世界の果てを見てくるぜ、とか言っただけかに行ったわよ」

困惑する黒ウサギに追い討ちをかけるように飛鳥が言った

「どうして、止めてくれなかったんですか!？」

「止めてくれるなよと言われたから」

「なら、どうして黒ウサギに伝えてくれなかったのですか!？」

「黒ウサギには伝えるなよって言われたから」

「嘘です、御二人ともめんどくさかったただけでしょう!」

「うん」

どうやら、耀と飛鳥は知ってたようだ

「…箱庭」の貴族ともいわれる黒ウサギを怒らせたらいっただいどうなるか、その身で味わせてやるのですよ」

なんだか、黒ウサギが怖い…何か変な黒いオーラみたいなのが見えるというか何か先程まで黒かった髪がいきなり桃色に変わった

能義は黒ウサギは怒らせないようにしようと静かに自分の心の中で誓った

「御三人様はこのまま真っ直ぐ、歩いていってくださいこの先にある門で私達のコミュニティのリーダー、ジン・ラッセルが門の前で待っておりますので、く・れ・ぐ・れも何処かに行ったりしないように!!」

「は、はい…」

それだけ言い残すと黒ウサギは脱兎の如き勢いで十六夜の追跡いや、あの勢いはそんな生易しいものなどではない、追撃を開始した

”箱庭”のウサギは随分と速く跳べるのね」

飛鳥の何気ない一言が能義に改めて、此処が人外達の住まう世界だという事を再認識させたのだった

そして、現在、黒ウサギと別れて五分ほど経った今大きな門が見えてきた、そしてその門の前で門の前の階段に腰掛けて本を読んでいる少年の姿が見える

予め、黒ウサギから聞いていた見た目の情報と酷似するどうやら彼がジン・ラッセルという、僕らが所属する事になったコミュニティのリーダーと見て間違いなさそうだ

「えっと、君がジン・ラッセルくんかな?」

「…そうですけど、貴女方は?」

ジン・ラッセルは読んでいた本を閉じて立ち上がり、能義を見つめた

能義は何故だか小さな子供に、下から顔を覗かれる事にトラウマがある為、あまり良い気分にはならなかったがそこは何とか涙目になるだけで堪えた

「大丈夫ですか？何だか辛そうですが…」

「う、うん気にしないで…大丈夫だから…」

何とか涙目で堪えてた筈なのだが、優しくされた事によりボロボロと涙が溢れ落ちてきた

「このままだと話が進まないわ、能義くん代わって」

そして、そんなやり取りを見ていられなくなった飛鳥が能義の代わりに黒ウサギとの事、自分達がこれからジンのコミユニティでお世話になる事を伝えてくれた

「…これ使って」

未だに涙が止まらない能義に耀がハンカチを差し出してくれた、能義はまた泣いた…

それから能義が泣き止んだのは、ジンに案内されてカフェに辿り着き、大男に突き飛ばされてからだった…

「ガルド！僕の仲間は何をするんですか！」

ジンが能義を突飛ばし、強引に席を奪って同席をしてきたスーツ姿の大男に激怒する

周りにいた他の客達も悲鳴をあげる者、会計も済まさずに店を出ていく者、店員に知らせに行く者、様々な反応があった

「仲間？…この何時までもピーピー五月蠅いのが貴方の仲間ですか？ジン・ラッセル」

ガルドと呼ばれた大男とジンとの間には何か因縁があるようだった

「良いんだ…ジンくん僕が悪かっただ、店の人達にも他のお客さんにも迷惑をかけてしまって、ごめんなさい、今はお金はありませんが、こ

この弁償は必ずします…」

ガルドに突飛ばされた能義は、他の客席に突っ込みテーブルや椅子の下敷きになっていたが、何とか自力で這い出てきて、その場で頭を下げたが、その体は傷だらけで所々出血しているのも見られた

「ハッ、こいつが仲間か！ノーネーム」に相応しい良い仲間じゃないか！」

「ガルド!!」

突き飛ばされたまま、やり返しても来ない能義をバカにしたように笑う、ガルドに能義は悪いのは自分だといったが、ジンにはそれが我慢が出来なかったしかし、此処が誰の領地かを知っているジンは手が出せずにいた

そして、そんなジンを見てガルドは口元を大きく吊り上げニヤリと笑った

「どうですか？その御嬢さん方、こんな情けない男の率いる”ノーネーム”などじゃなく黒ウサギ共々、私のコミュニティ”フォレス・ガロ”に入りませんか？」

ガルドは先程までジンや能義に見せていたような獣のような表情ではなく、とても紳士的そうな顔で飛鳥と耀を見た

「お断りするわ」

「答えるまでもない」

とは言え、当然これだけ野蛮な行いをしたあとでそんなスカウトが受けいられる筈も無いことはガルドも内心では理解していた

ガルドは能義の泣き声が鬱陶しくてつい彼の素が出てしまったのである

「…ちっ！オイ、お前此処の支配人はオレだ!!弁償代金なんて要らねえからオレの気が済むまで今この場で殴らせろ!!」

ガルドの言ったことは無茶苦茶だった、確かに物を壊したのは能義がぶつかったからだ、だがテーブルや椅子を壊すことになった原因を作ったのは、能義を突き飛ばしたのはガルドなのだから

それにこの返済方法はガルドの気が済むまでと明確な終わりが話されてはいなかった

だが、そんな無茶苦茶な注文に対して能義は…

「良いよ…でも今と同じように僕を傷付ける事が出来るのならやってみせてよ」

挑発だった、とても臆病で温厚な能義が言ったとは思えないようなそんな言葉を確かに能義は言った

それは彼を少しでも知る者からしたら、妙な違和感や不思議な不気味さを感じさせたが、今、会ったばかりのガルドはそこに気付かない「テメエ、人前だとオレが何も出来ねえとでも思ってるなら大間違いだぜエ!!」

先程まで辛うじて人の姿に見えていたガルドの見た目が二メートルを越す巨大な人型の虎のような姿に豹変した

ガルドは虎の獣人だ、それも魔王の眷属という飛びつきりの化け物だ

そんな、化け物が能義を全力で、殴る為ではなく、それ以上生意気な口をきけないよう還付なきまでに壊す為に拳を固めた

そして、ガルドの一撃必殺の拳が能義の顔面めがけて振り下ろされる事はなかった

何故なら、耀がガルドをその場に押さえ付けたからである

「これ以上はやらせない」

耀に完全に押さえ付けられたガルドを見てから、能義はその場に倒れた…

「んっ、ようやく目を覚ましおったか」

次に、能義が目を覚ましたのは、見知らぬ白い少女の膝の上だった

第八話 新生”ノーネーム”存亡の危機

「ん？、ようやく目を覚ましおったか」

能義をそう言い、見つめていた白い少女は、まだ年端もいかない子供に見えた

「能義さん！大丈夫なのですか!？」

「別のコミュニケーションと盛大に揉めたんだってな、へえ大人しいように見えてやるじゃねえか、能義」

「もう、十六夜さんも少しは反省してください！」

「どうやら、黒ウサギは十六夜を見つけたようだ良かった…」

思いつきり、頭をぶつけたからだろうか？思考が良く回らない、気を失う前に最後に覚えているのは自分の中にいる存在が、何度も頭の中で、避けないと死ぬと危険を知らせてくれていた事だけだ

だが、何とか生きているところを見ると、どうやら自分は助かったらしい

自分の中にいる存在が、飛鳥と耀が自分を助けてくれた事を教えてくれた

助けてくれた二人に何とか感謝を伝えようと、未だに思考が纏まらない頭で目だけを動かし二人の姿を探すが、飛鳥の姿はそこにはあつたが耀の姿はそこには無かつた…

「飛鳥…耀は…?」

もしかしたら、自分をガルドから庇って酷い重症を負ったのではないか、そんな思いが能義の脳内を駆け巡った

「能義くん、目を覚ましたの？安心して春日部さんは無事よ今のところは…」

飛鳥の言い方には妙な突っかかりがあつた、まるで耀がこれから無事ではなくなるかもしれないような

「春日部さんは今グリフォンとのギフトゲームとの最中よ、そしてそのチップに春日部さんは自身の命を掛けたわ」

「…へ?」

「どうやら、能義が気絶している間に本当に色んな事があつたようだ、まずガルドの非道な行いが判明したこと、単独行動をとっていた十六夜が大きな戦果を持ち帰ってきた事、中々店にいれてくれない店員が能義の手当てをしてくれた事、そして問題児たちが”最強”に挑んだ事」

「どれもこれも目を覚ましたばかりの能義には理解が出来ないことばかりだったが、最後のだけは今の頭でも嫌、自身の直感がヤバいと教えてくれる」

「そして、能義が何よりも驚いたのは今自分を膝枕しているこの子供が、その”最強”だという」

「それはこんな小さな子供が…こんな小さな子供が…」

「ん？なんじゃ儂に惚れたか？それもしょうがないのくなんせ、こんな美少女に起きたら膝枕されてたんだからの」

「最強の子供は何やら自慢気そうに何かを言っていたが能義の頭は今それどころではない…」

「そして、能義はトラウマを甦らせ、盛大に吐いた…」

「そして、”最強”の叫び声が響き渡り、その叫び声は”試練”の最中に気を失いかけていた耀の意識を取り戻し、これから全力を出そうとしていたグリフオンの意識をかき乱し、耀は命を掛けたギフトゲームに無事勝利し、新たな恩恵を手に入れたのだった…」

「お主、人の膝の上でいきなり吐くとはどういう了見じゃ！」

「白夜叉様、どうか落ち着いてください！」

「着替えの終わった、最強の子供、黒ウサギから白夜叉と呼ばれたその、子供は黒ウサギに後ろから抱き抑えられながらも扇子の先を能義に向けて抗議してきた」

「ごめん…何だか気持ち悪くなっちゃって…うっぷ」

「問題児三人も、白夜叉を哀れむような目で見ている、とても先程”神”にも等しいような事をやってのけた存在とは見えなかった」

能義はとある一件によりやたらと強い子供に対して一種のアレルギーみたいなものがあるのだが、当然そんな事は此処にいる全員が知る筈もないので端から見るところだ

白夜叉が心配そうに能義を膝枕している

← 能義は目を覚ましたようだ

← まだしつかりと意識が戻ってないようだ

← おどけてみせる白夜叉

← 能義ここで初めて白夜叉の姿をちゃんと見る

← そして、吐いた

「失礼にも程があらう！」

涙目で訴えてくる、白夜叉の姿はその姿相応の年齢に見えた、まさかこの小さな子供が千年以上の時を生きているだなんて能義には思いもしなかった

「あはは…えっと本当にごめんね？」

涙目の子供の姿に、たじたじと罪悪感とトラウマから逃げ出したい思いを何とか押さえつけようとしながら後ろに後ずさりをしていく能義

とても、情けない姿だが、これでも能義のいた世界では最高峰の”才能”の所有者だというのだ

そして白夜叉はつい、この者を試してみたくなった

「お主、本当に悪いと思っっているのだな？」

「それは勿論！」

ブンブンと何度も首を縦に振り全面的に自分の否を認める能義に
白夜叉は一つ提案を出すことにした

「それじゃあ、儂とお主で一つ、ギフトゲームをしようではないか、お主が負けたらお主が汚した服の代金はお主に払ってもらう、もしお主が儂に勝つことが出来たのなら、服代は要らぬし、その時はこいつをやろう」

そういうと白夜又は手を叩いた、すると四枚の光る紙が突然現れ、規則正しく宙に浮いていた

「ラプラスの紙片!？」

黒ウサギの反応から見るにどうやら、かなりの高級品である事は理解できた、そしてそれは此処まで良いところ無しの能義には名誉挽回のチャンスのように感じれた

「聞けば、お主はまだ一度も”ギフトゲーム”を行った事がないらしいからの、特別に勝負内容はお主に決めさせてやろう、お主の得意な事で良いぞ、まあ、断っても良いがその時はこの服の代金は自腹で払ってもらうぞ」

「流石は”最強”、随分と優しいんだな」

十六夜が何処か面白くなさそうな感じで言った

「なーに、お主らも出発早々借金を抱えたくはないであろう？サービスじゃよ、サービス、ちなみにこれが、こやつ汚した服の値段じゃ」
そういうと白夜又は何か文字の書かれた紙を差し出してきて、黒ウサギがそれを受け取った

「し、白夜叉様…これ？桁を四つほど間違えてお書きではありませんか？」

この世界に来たばかりの四人には、この世界の金銭感覚は分からないが黒ウサギの反応だけで、それが新生”ノーネーム”初の存続の危機だという事を理解させた

「負けるんじゃねえぞ！能義」

「能義くん頑張つて！」

「負けたら承知しない」

「能義さん、無理を承知でお願いします！どうか勝ってください!!」

十六夜に叱咤され、飛鳥に応援され、耀に後がないことを教えられ、黒ウサギにを受けて勝つしか生き残る無い事を教えられた能義が出

した勝負内容は…

「それじゃあ、ジャンケンでお願いします」

ジャンケンだった…そして能義の人生史上最大にして最後になる
だろう絶対に負けられない、ジャンケン勝負が始まるのだった

第九話 威圧

突然だが、能義が幼少期の頃どんな遊びをしていたかという話をしようと思う

幼少期の時に、同じクラスの男の子と言い合いになったことが原因で、親から一切外に出してもらえなかった能義が、まだ遊びたい盛りだった時にその欲求をどうやって押さえ込んでいたかだ

それは孤独の中で生み出された究極のお遊戯

”一人ジャンケン”である、そして能義はこの遊びを究極とも言える世界にまで鍛え上げた世界で唯一の人間なのだ

「勝負内容はジャンケン、本当にそんなもので良いのか？」

勝負内容を決めて良いと言ったのは自分の筈だというのに、思わず能義に勝負内容を変えないかという提案をしそうになってしまった

それほど、今、能義が白夜叉に放っているプレッシャーは凄まじいものだった、それは圧倒的優位な状況にいる筈の白夜叉が、思わず目の前の少年とのジャンケン勝負から逃げ出したくなるような…

「はい、一回勝負でお願いします、黒ウサギも皆もしっかり見ててよ、多分、この勝負一瞬で決まるから」

能義は右腕の袖をめくりあげて手を突きだした

「せ、せめて三回勝負にせんかの…？」

あの白夜叉が、能義との一発勝負から逃げているその事実がその場にいた全員に能義の勝利を確信させた、いける能義はきつとジャンケンに絶対に勝てるそんな都合の良い能力を持っているに違いないと「勝負内容は僕が決めて良いと言ったのはそっちだった筈だよ、行くよジャンケン！」

「ま、まだ”ギアスロール”の作成もしておらんのだが…ええい！どうとでもなれ！」

「ポン！」

白夜叉は神頼みだと言わんばかりに、目を瞑って勝利を祈った…そしてその手が出したものは…チョコキ

そしてそれに対し、能義の出した手は…パーであった

「勝った…？勝ったぞー！！見たか黒ウサギー！」

”ギフトゲーム” 初心者 of 正確に言えば”ギアスロー”を作成してないので正式なものではないのだが、能義にジャンケンで勝ったというその思いが白夜叉の心に不思議と達成感を与えさせた、実際やってたのは、ただのジャンケンなのだが…能義の放つ謎の気迫によつて白夜叉には”人類最終試練”と同等のものにも感じられたのだった

そんな喜びを隠そうとはしない、白夜叉に対してジャンケン勝負に負けた能義はというと…してやったと言わんばかりの笑みを浮かべていた

「まさか能義の奴、最初からこれを狙ってたのか…！」

「大人気ない…」

「ええ、全くね」

端から見ていた問題児たち三人は、今のやり取りが全て見えていたようだ

ジャンケンには明確な必勝法などという物は存在しないしかし、勝てる可能性が非常に高い方法が一つある

それは…相手に”万人共通の反則行為”つまり”後出し”をさせることだ

これが、通常の人間同士のジャンケン勝負であれば後だしの基準など本当に明確なものだ

どういう事かという、例えば、十六夜と普通の人間がジャンケン勝負を百回やったとしよう、だが、その勝敗は十六夜が負ける気がない限り百回全てに十六夜が勝つだろう

何故そうなるか？答えは簡単だ、普通の人間とそうでない人間では勝負の手を出すまでに貰える時間に天と地ほどの差があるからだ

つまり、相手が何を出そうとしたところで十六夜は相手が出す手を見てから自分の手を出せば良いのだから

そして話は、白夜叉と能義との勝負に戻る

人外の存在白夜叉と普通の人間と大差ない能義とのジャンケン勝負にも同じように体感時間の差が生まれるのだ

その差は、能義からしては見ることはおろか、気付く事も出来ないような差だ、これがもし普通の人間が審判をしている世界であれば間違いなく白夜叉の勝ちだったろう

だが、此処は”人ならざる者達”の住まう世界”箱庭”ならば当然”後だし”の基準も”人外”基準になる

「白夜叉様と能義さんのジャンケン勝負！…白夜叉様の反則行為により能義さんの勝利です♪」

黒ウサギの公平な審判のもと、能義の勝利が宣言されたのだった

「な、なんじゃとー!？」

本日、二度目の”最強”の絶叫が響いたのだった

能義が白夜叉に勝てた理由はいくつかある

一つは、能義が、ただの一度もジャンケン勝負で負けたことが無かった事、勿論、勝ったこともないが、その為ハツタリが生きたと言えるだろう

そして、能義が白夜叉に考えさせる時間を与えなかった事、これにより白夜叉のリズムを崩す事に成功した、これがもし三回勝負であれば白夜叉は必ず調子を取り戻し持ち前の怪物ぶりで、残り二戦とも間違いなく勝利していた事だろう

そして最後の理由が懸けてる物の割に勝負内容があまりにも呆気なさ過ぎた、それが、本気で”ノーネーム”を潰そうと思っているわけではない白夜叉に、ただでさえ短い思考時間の中に余計な邪念を生ませたのだった

これら全ての条件が揃って、ようやく勝てる存在なのだ”最強”のフロアマスター白夜叉という存在は

「ハア…緊張したあー」

全てが終わった瞬間、能義はその場に崩れ落ちた、そしてもう二度

と能義はジャンケンにおいてあのような気迫を放つことは不可能になった、何故なら能義の基準では今のジャンケン勝負は白夜叉に敗北したことになるのだから…

今のは負けたことが無いからこそ出来た、一種の魔法のようなものなのだ

とはいえ、それだけの理由で白夜叉程の存在が警戒、勝負から逃げ出したいと思える程の気迫をただの人間である、能義が出せるはずもなく、そこは能義の中にある存在が力を貸したのだが…その事実には気付けたものは、その場にいた一匹の猫を除いて誰も居なかった…

第十話 才能

白夜叉とのジャンケン勝負、勝利したのは新生”ノーネーム”の柳能義だった

「ジャンケンとはいえ、この儂にあれほどのプレッシャーを感じさせるとは…いやはや、実に見事であったぞ、もしや、お主、元の世界では、さぞかし名のある”神童”だったのではないか？」

白夜叉が嬉しそうに、能義を見つめていた

その顔は、久々に良い退屈しのぎが出来たらしく、とても満足げだった

「いえ、僕はそんな大したものじゃないですよ…それに今の勝負だって、勝たせて貰っただけだと僕は思ってますから」

そう、今の勝負は決して、対等なものではなかったのだ

勝負内容を決めさせて貰い、相手の精神的弱点を突き、その上で、二対一というハンデを利用して初めて勝利するが出来たのだ

とはいえ、その勝利も圧倒的な勝利とは言えないものだったのだが…改めて、目の前の存在がいかに規格外なのかを教えさせられた気分だった

「…何はともあれ勝ちには勝ちじゃ、ほれ、約束の”ギフトカード”じゃ持ってけ」

白夜叉が手を叩くと、再び四枚の光輝く”ギフトカード”がそれぞれ、十六夜、飛鳥、耀、そして能義の前に現れた

「能義さーん」

突然、自分を呼ぶ黒ウサギの声が聞こえ、振り返って見るとそこには黒ウサギと問題児三人組が集まっているのが見えた

「能義さんもこっちにきてこれを機に、皆さんと”ギフトカード”の使い方について勉強しましょう！」

どうやら、黒ウサギが何やら、四人に”ギフトカード”の使い方を教えてくれるようだ

「ありがとうございます、楽しいゲームでした！」

能義は白夜叉に頭を一度下げてから、黒ウサギ達の方へと走って

いった

「勝たせて貰ったか…勝たせてやるつもりはこれっぽっちも無かったんだがの」

遠ざかっていく能義の後ろ姿を見ながら、白夜又は誰にも聞こえないくらいの小さな声で言った

そう元々、白夜又は服の代金の事も気にしておらず、景品として賭けた超高価な恩恵である”ギフトカード” 《ラプラスの紙片》の事さえも、ただで渡すつもりだった

だが、それをしなかったのは単純に、能義の力を見てみたいと思っただけだからなのだが…

何故、この世界に選ばれたのか、予測もつかない程の弱者である能義がいったいどんな力を持っているのかを見てみたいと考えたからだ

もし、能義が負けたところで適当に、コミュニティ再建の前祝いだとか何とか都合の良いことを言っただけで景品は渡すつもりだった…

だが、実際はどうだ？

能義は自らの力で、勝利をものにしたら、それも勝ちにいったはずの自分に対してだ

そして、何よりも白夜又は敗北感を感じさせたのが…

「まさか…この儂が初めて”ギフトゲーム”をする小僧を相手に手に汗を握る事になるとはな…手に汗を握るなどいったい、いつ以来振りかとう」

白夜又は自分の掌に確かに滲んだ汗を見て、能義との勝負がもし、今日やったような”お遊戯”などではなく”決闘”だったらとそこまで考え、自分の口元がつり上がるのを抑えきれなかった

「これはまた、面白い奴が来たの」

現在、黒ウサギ先生の授業も終盤に差し掛かっていた最後の項目は自分の”才能”を鑑定してみようだった

此処まで順調に進んできた授業だったのだが、ここで問題が発生した

まず、飛鳥は無事に自分の”才能”について知ることが出来たよう

だ
飛鳥の”才能” 《威光》は黒ウサギが言うには他者を支配する事が可能な力だと言う

思い返して見れば飛鳥の言葉には、不思議と言葉の重みを感じる場面があった、あれはその能力による影響だったようだ

しかし、自分が言葉の重みを感じていたとき黒ウサギは何ともない様子だったのだが、あれはいったいどういう事なのだろうか？

そして、耀も同じように問題なく自身の能力を知ることが出来たようだ

耀の”才能” 《生命の目録》は自分が友達になった動物の生物学的な利点、例えば犬なら嗅覚、鳥なら視力といったように動物から恩恵を貰える恩恵というような感じらしい

ただ、他にも何か重要な事があるような気がするのだが…思い出せそうもない

そして、次に十六夜だが、ここで問題が発生した、”才能”名が表示されずに”正体不明”というエラーを示す言葉が表記されたのだった

どうやら、十六夜の”才能”は”ギフトカード” 《ラプラスの紙片》でも識別出来ないほど超レアな”才能”らしい

そして、最後に能義なのだが…
そこには、何も表記されなかったのだった

十六夜のようなエラーの文字も、所有しててであろう筈の”才能”の事も、そして、そこまではまだ良かっただがその後…

突然、”ギフトカード” 《ラプラスの紙片》が赤黒い、霧のようなものを発し始めたのだった…

第十一話 怪物

突然、能義のギフトカードから赤黒い霧のようなものが立ち込み始めた：

やがて、それは一ヶ所に収縮し、人の形を為し始めた

「…これが、能義くんの”才能”なのかしら？血と同じ色の霧なんて能義くんの”才能”にしては随分と物騒ね」

今も尚、絶えず形を変え続け、何とか形を為そうとしているその不可思議な霧に飛鳥が触れようとした瞬間：

「お嬢様！ソイツから離れろ」

「え？」

その場にいた、誰よりも早く”ソイツ”の異質さに気付いた十六夜が飛鳥を抱き抱え、その場から離れた

「GYAAAAAAAAAAAAaaaaaa!!!」

突然、”ソイツ”は咆哮を上げた

そして、次の瞬間…先程まで飛鳥の居たところに巨大なクレーターを作り上げた

たったそれだけの事で地盤が崩壊し、数百メートルにも及ぶ地割れを作った

そしてそれは、その場にいた全員が、その場から離れることを余儀なくされた

「何なのだこやつは!?!」

異常を感知して、直ぐ様駆け付けた白夜叉もただ闇雲に力をぶつけているだけの”ソイツ”の事を知らないようだった

つまり、”コイツ”は白夜叉が用意したモノでもこの世界に元々住んでいるモノでもないという事だ

「わからない、いきなり能義の”ギフトカード”から出てきた」

先程、グリフォンとの”ギフトゲーム”に勝利し、それにより手に入れた恩恵を使い何とか宙に逃れていた耀は白夜叉に目の前で起きた事をそのまま話した

「何?ギフトカード”から出てきたじゃと…?まさか…いや、そんな

事がありえる筈が…」

白夜又は何か思い当たる節があるのか、何かを考えているようだ
「だとしたら…不味い！能義は、能義は何処におる!?あやつを止められるのは能義しかおらん！誰も手を出すな！」

しかし、近くに能義の姿は見えなかった、先程の地割れにでも巻き込まれたのだろうか？

もし、そうだとしたら、普通の人間と同程度の耐久力しか持たない能義が無事である筈がない

そして、そうなると目の前の存在に唯一対抗できるはずの存在を失った事になる、白夜又は自然と焦りを感じていた

「手を出すなつてのはどういう事だ、白夜又」

「…恐らく、今暴れてる、”アレ”はギフトカードそのものと見て間違いない」

「あり得ません、ギフトカードが意思を持ち暴れだすなんて！」

ジンを安全な所まで避難させてきた、黒ウサギが白夜又の言った事を否定する

「あくまで、僕の推測でしかないのだが、能義の”才能”は”狂化”と同じような性質を持つものと見て間違いないだろう、そしてその”才能”を鑑定しようとしたラプラスの恩恵も…」

「その狂化の影響を受けてしまい、知性無き暴れるだけの存在へと化したって訳ね」

「うむ、そして恐らくその性質は今、あそこで暴れているあやつにも引き継がれていると見て間違いないだろう」

「…つまり、誰も手を出せない”怪物”が誕生したってわけか」

その場にいた全員が、目の前で力任せに暴れまわる存在をただ見ていることだけしか出来なかった

幸いな事は、ここが白夜又の所有している世界の一つであり、人が溢れかえっていた町ではないという事だ

いずれは、あの暴走を繰り返しているやつも力尽きる事であろう、しかし、それはいつたい何時になるのかそれは白夜又にも予測が出来なかった

「でも、能義ならあの”怪物”の止め方を知ってるはず」

そう能義は、ギフトカードを”怪物”に変えた、その力を宿している張本人にも関わらず、本人があのように凶暴化しているところを見たことはない

「ああ、その通りだ春日部、匂いで能義の居場所は掴めるか？」

「わからないけどやってみる」

「うむ、頼むぞ、あやつのが力がどういったものなのか不明な以上、”アレ”に対抗できるのは能義しかおらん」

「…見つけた、彼処」

そう言い、耀が指差したところは…最初の一撃により崩壊した地面から掘り起こされた、巨石の下だった…

四メートルはあろうかという巨石は普通の人間と同程度の耐久力しか持っていない、能義が潰されたのなら生存はまず、不可能だ

そう、地面が通常の状態なら、しかし最初の一撃で崩壊した地面は既に地面としての役割を果たしておらず、天然のクッションと化していた

「あの石の下で生きてはいるけど、出られないでいるそんな感じかしら？」

「そうみたい」

「何にしても、どうにかしてあの石を退かさないと駄目ね、十六夜くん退かせるかしら？」

「あの程度の石ならどうって事はないだろうが、その間”アイツ”が大人しく待っていてくれるとは限らねえ」

今は無差別に暴れまわっているだけのように見える、

”アレ”だが、それは果たして十六夜が近くに来ても同じなのだろうか？

もしかしたら大丈夫かもしれないが、最初にアレに触れようと近付いた飛鳥に対し攻撃を行ったところから見るに、その飛鳥を助けた十六夜を、敵として認識していても可笑しくはなかった

そして、捕まれば当然アウトだ、白夜叉の推測が当たっているのであれば反撃をする事もアウトだろう

”アレ”から注意を引き付けるには、”アレ”が絶対に捕まえられないほど素早く、尚且つ距離を開け過ぎずに逃げなければならぬ、そしてそんな事が可能なのは…

「儂がやるしかあるまい」

白夜又は理解していた、あの”才能”の危険性を、そしてもし自分があの力に吞まれようものならそれこそ多くの者に被害が出るという事を、しかしそれでも彼女は選んだのだ、フロアマスターとしてはなく一人の友人として未知の驚異から新生”ノーネーム”を守る道を…

「いえ、黒ウサギが囿になるのですよ、白夜様にもしもの事があつたら、それこそ勝ち目が無くなります」

しかし、その行為は当然、フロアマスターとしては褒められたものではない、そして何よりも、もし白夜又がああの”才能”に吞まれようものなら、人類はあの”怪物”の相手だけではなく、”最強”のフロアマスターを相手取らないと、いけなくなる

それだけは何としても避けなくてはならなかった

「という事で、黒ウサギが時間を稼ぎますので、その間に十六夜さんは能義さんの救出を、飛鳥さんと耀さんは、もしもの時のためにジン坊っちゃんを守っていて下さい」

「ああ、しくじるなよ黒ウサギ」

「分かったわ…無理はしないでね、黒ウサギ」

「こっちは大丈夫だから気にせず戦って」

黒ウサギの出した指示は、同時に今この状況では無力な飛鳥と耀を安全なジンのいる場所まで逃がす事にも繋がっていた

そして、飛鳥はどうやらそれに気付いているようだった

「黒ウサギはあの問題児様を止めて参りますので」

黒ウサギは自ら、”未知の怪物の相手”という大火の中へと飛び込んでいった…

「U A A A a a a a …」

怪物は疲れ果てていた：

一瞬でも気を抜こうものなら即座に崩壊してしまうであろう、実体が無いに等しい己の体に対しての疲労感

そして、それ以上に大切な何かが足りないという欠如感に襲われていた、それは力などという単純なものではなくもつと大切なそれがいりだけで不思議とどんな苦しみにも耐えれた、そんな存在

そう誰かもう一人居たような気がする、目を離せない程弱く、嫌気がさすほど臆病で、そして自分の力を優しく受け入れてくれた、そんな存在が

しかし、その姿が見えない、あの声が聞こえない

”怪物”は餓えていた：

弱さに、騒がしさに、そして優しさに

もう、此処を出て行って他の所でアイツを探そう、そう考えた時、目の前に奇妙な格好をした女が落ちてきた

「そこまでです！黒ウサギとゲームをしませんか？」

ゲーム：？何故だか不思議と心が温かくなる、そうだ、自分はいさつきまで居なくなってしまったソイツと一緒にゲームをしていた

「こう見えて、黒ウサギは足の速さには絶対の自信があるのですよ、貴方が黒ウサギを捕まえたら貴方の勝ち、私が貴方から逃げ延びる事が出来たならば貴方には在るべきところに戻っていただきます」

在るべきところ：？それはいったいどこだ、何にしても足の速さに絶対の自信があると豪語するコイツの体に乗っ取れば、探しているアイツにも会えるかも知れない、ならやる事は決まっている

怪物は黒ウサギの前に片手を突きだすと指を一本ずつ倒していく、大体一秒間隔ずつ折られていく、その指は”怪物”が黒ウサギを仕留めに掛かるまでの猶予時間を示していた

そして、その猶予時間の中、黒ウサギは予想外の事態に焦りを感じていた

一つはこの怪物が、理性の無い、ただ暴走をするだけの存在では無かった事について：

知性を持った怪物と戦うという事と、ただ暴れまわる怪物を相手に時間稼ぎをするのでは作戦難易度が大きく異なる

知性を持った”怪物”と戦う際には行動に対して常に慎重な選択を迫られる事になるのだ

それは、ギリギリ捕まらない程度の距離で逃げ続ける事を余儀なくされている黒ウサギにとっては最悪の事態と言っても良いだろう

だが、それ以上に黒ウサギに焦りを感じさせた事があるそれは…黒ウサギが時間稼ぎをしている間に十六夜から助け出された能義が目覚まさない事だった…

黒ウサギはその異常事態に、その優れた聴覚を持って気付いてしまったのだ

「くっ…どうなってやがる、目を覚ましやがれ能義！」

十六夜は苛立った口調で能義の体を何度も揺すが能義の目が覚める気配は無い

もしかしたら、巨石に押し潰されたときに頭を強く打ったのかもしれない

「うーん…あと五分…」

訂正どうやら、ただ気絶しているだけのようだ

しかし、その寝顔がとても幸せそうなのはきつと、この世界に来て初めて勝利することが出来たからであろうが…

一刻を争う状況の十六夜にとってはその寝顔は逆効果でしかない
「オーケー、能義、オマエがそういうつもりだってならこっちにだって考えてものがある」

十六夜の握る拳に自然と力が入る、この緊急事態時に呑気に寝ている能義にその怒りの矛先を向けた

十六夜から何やら不穏な感じの気配を感じた能義は慌てて飛び起きた

「な、何かな…？い、十六夜くん…」

「起きたか、起きるのがあと一秒遅ければこいつをその顔に叩きつけてやろうと思っただがな」

そういうと十六夜は態とらしく、その固く握りしめた拳を背中の方へと隠した

「全く、惜しいことをしたぜ」

そう言った十六夜の目は決して笑っていないかった：

そして能義は誓った、十六夜も怒らせないようになろうと

「所はどうして僕を起こしたの？」

「どうしたもこうしたもねえよ、アレ見てみろよ」

「アレ…？」

十六夜が親指を突き立てた方向を見るとそこには物凄いスピードで攻防を繰り返している黒ウサギと形を目まぐるしく変形させながら、黒ウサギを捕らえようとしている赤黒い霧状の何かがいた「えっと…何アレ？」

「オマエの”ギフトカード”だ」

「…そう僕のギフトカード…ええっ!？」

「止めようにも狂化付与の”才能”があるらしく俺達じゃ手が出せない厄介な相手だ、あの”才能”の所有者である能義ならアレを止められると思っただけ起きたんだ、今その為に黒ウサギが命懸けでアレから時間稼ぎをしてくれているところだ」

「…そうだったんだ、ごめんね迷惑をかけて」

能義は事の発祥は自分にある事を知り、また皆に迷惑をかけてしまった事を理解した

「でも、もう大丈夫…！僕が止めるから、十六夜皆に離れてるように伝えて貰える？」

そして、今も尚、猛威を振るい続け、徐々に黒ウサギの速さにも適応しつつある”怪物”の方へと足を踏み出した

「G A A A A A a a a a a a !!!」

”怪物”は徐々に進化をしていた、最初こそ永遠に黒ウサギを捕ら

える事はないだろうというほど黒ウサギと怪物の間には速度に差があった：

しかし、黒ウサギと追いかけてつこを繰り返しているうちに徐々にその霧状の体を使いこなし始め、腕だけを網状に変え黒ウサギを捕らえようとしたり、時に体を霧そのものに変えて黒ウサギが逃げようとする進路を塞いだりするその怪物は徐々に黒ウサギの速度にすら適応しつつあった

「こちらからは手を出せませんし、挙げ句の果て学習する”才能”だなんてチート過ぎます！能義さんはいったいどんな”才能”を所持してるんですかー！」

黒ウサギの泣き言のような悲痛の叫びも、目の前の怪物は当然、何も応えてくれないだが、その問いかけに応える者がいた

「それは僕の”才能”じゃないよ、僕の友達の”才能”の一部さ」
「……！」

そして、怪物は無防備に近付いてくる、その者を見つけた時動きを止めた

「随分と派手に暴れたみたいだね、もう大丈夫だから戻っておいで」

能義がそういうと先程まで、暴れまわっていた”怪物”は何処かへと姿を消し、そこには血の色をしたギフトカードが一枚横たわっているだけだった：

柳能義、所有 ” 才能”

《奇跡の入れ物》 《絶対者の理解者》